

チェルノブイリに思いをよせて

ホレーンエ

阪神・淡路大震災 被災者支援の活動つづく

○月29日、西宮市から神戸市長田区まで避難所やテントを訪問してきました。震災から2か月半経っているにもかかわらず、崩壊した家々やその瓦礫、崩れかかったマンションなどが手付かずのまま残っています。今更に、震度7の恐ろしさを、自然に逆らった人間の愚かさを、私たちに突きつけているようです。

そこには、20数万の人生が一瞬にして埋め込まれてしまった、そんな思いが胸を塞ぎます。3月31日で多くのボランティアが撤収するようです。チェルノブイリ救援・中部では、もうしばらく被災者の方たちの自立のお手伝いを続けます。



小笠原 宣・作 『救い』

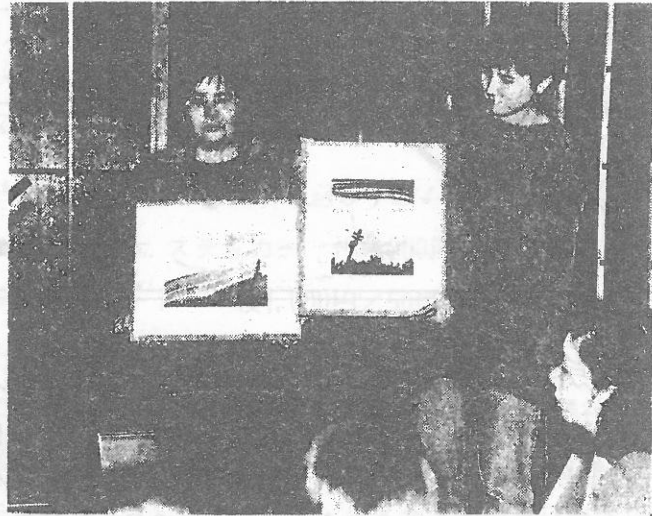
《事務局》 〒466 名古屋市昭和区楽園町137-1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：渡辺春夫

【郵便振替】00880-7-108610 (旧号 名古屋8-108610も可)

☎fax: 052-836-1073 (月・水・金・10:00~15:00)

(問い合わせは、お名前とシールの番号を明記し、返信用切手を同封の上、なるべく郵便でお願いします)



神戸市のイラストレーターが一時避難した岐阜で初めて描いた「震災の神戸」。話を聞きに集まった市民らにカンパで引き取られた。岐阜市大門町、上宮寺

# 「神戸を忘れないで！」

## 被災のイラストレーター 生々しい体験語る

### 阪神大震災支援、岐阜市で囲む会

「今、欲しいのは心の支え。神戸のことを忘れないで」としぼり出すように語る声に、「頑張るよ」「忘れないよ」の声が漏れた。阪神大震災で被災した神戸市のイラストレーター(四〇)を囲む「本当の神戸を聴く会」。二十五日夜、岐阜市大門町の上宮寺で開かれ、市民ら四十人が息をのむように話に耳を傾けた。

被災者の受け入れや物資援助などの救援活動が続ける市民団体「チェルノブイリ救援・岐阜」が主催。青年は同団体が受け入れた二人目の被災者。がれきの町の川岸で一月、テント生活を続け、体を壊すほどに重い消毒剤を担いで近

「長引く避難生活の中でトイレも取り合えず悪くなっている。腐りかけた弁当が山積み。一方で、下痢を恐れて空腹に耐えている人がいる。最後のテントがなくなる日まで、神戸のことを忘れないで」と訴えた。同団体ではこれから正念場の救援資金を作るため、三月一日午後七時から岐阜市佐久間町の真婦人生活会館で慈善コンサートを開く。意気に感じてジャンソ

ン歌手今里哲さん、岐阜市在住のラークシンガー南修治さん、恵那市在住のノーギャラで出演する。連絡先は寺町緑代表、電話0581(22)2281。

↑  
1995.2.25  
岐阜新聞

阪神大震災の救援活動にかかわって、チェルノブイリ原発事故直後の状況とあまりに似ているのが、気になります。2カ月たっても人々の生活は人間らしい暮らしとはほど遠く、仮設住宅の建設も進まず、避難生活が長期化しています。放射能汚染はありませんが、発ガン性の強いアスベストが被災地の空気を汚染しています。

マスコミの報道もほとんど無くなり、救援物資は減り、ボランティアも少なくなっています。救援とは何か、私たちに何が出来るか、無力さを感じながら手探りで進んでいる状況もまた、チェルノブイリ救援と酷似しています。



# 阪神大震災 支援プロジェクト報告

3月27日現在、81人1団体

総額 570,653円のカンパがありました。

～ご協力くださった皆様に、感謝もうしあげます～

チェルノブイリ救援・中部では、この皆様からの暖かい気持ちを、義援金としてではなく、被災者の方に直接役立つ活動に使わせていただきます。

今までに、10数回現地へ行き、次のような活動の一部に使わせていただきました。

## 【直接届けたもの】

●医薬品 かぜ薬（174箱） うがい薬（110箱） ホカロン（400箱）  
マスク（1,648枚） 下痢止め（100箱） 目薬（100箱）  
ウェットティッシュ（418箱） ビタミン剤（100箱）  
湿布薬（882箱）など。

●自炊セット 50組 カセットコンロ・ボンベ、米、野菜、包丁、まな板など

●生活用品 皆様から届けていただいたもの（電気製品、文具など）

●衣類 肌着（200枚） 中古衣類（防寒着など）

## 【届けたところ】

☆駒ヶ林テント村（長田区） ☆ちびくろ保育園（兵庫区）

☆神戸YWCA（中央区） ☆鷹取キリスト教会（長田区）

☆灘区在宅福祉センター（ディホーム六甲） ☆岩屋公園テント村（灘区）

☆その他、テント生活者や在日外国人の方など

## 【被災者の受け入れ】

●現地にポスターを貼ったり、マスコミで呼びかけたところ、短期休養から定住希望者まで、23組の希望がありました。

●そのうち、15人の方が、3日から1週間の短期休養をされ、元気に帰って行かれました。

●10人の方が、岐阜での定住を希望され、短期休養のあと、市営住宅の紹介や就職のお手伝い、生活用品の援助などを行っています。

被災者の方々への支援は、4月いっぱい続ける予定です。

引き続き、皆様の暖かいご支援をお願いします。（震災支援プロジェクト）

## 岐阜から神戸へのメッセージ

1月17日、あの日以来これからどうなるのだろう・・・どうすれば良いのだろう、今何をしたら良いのだろう・・・ただそれだけ考え結局何もつかめず呆然自失、そして一人避難所の片すみでうずくまってる、そんな二週間がすぎました。身寄りのない一人者にはつらい毎日でした。そして最初に考えたのが何とか早く少しでも普通に近い生活がしたい、何とかここから抜け出したいということでした。そんな時目に止まったのがボランティアのポスターでした。「岐阜県で緊急に安心して住める場所を提供します」という物でした。今までボランティアのお世話に直接なったこともないし、まして参加したこともない自分には、失礼な話ですが半信半疑でとりあえず電話しました。その先方の言葉は、「ともかく一度こちらへいらっしやい。そして暖かいお風呂に入って、皆でおいしい物を一緒に食べましょう。そして、ゆっくりくつろいでちょうだい。」と本当に明るい声で、まるで旧知の友達を迎えるような言葉でした。今思っても、あの一言が自分の人生の再出発のきっかけになりました。ともかく行って見よう、それだけで岐阜に向かいました。(中略)

お陰で、ちょうど一週間たった今日、自分に最も適した仕事が見つかりました。今日からまた働けます。自分で生活が出来ます。10日前の自分がうその様な位です。もちろん、これで今までの人生の全てが戻ったわけではないです。ただ、マイナスだった所から一応ゼロのスタートになりました。もうすんだ事は仕方ない、クヨクヨしても仕方ない、じっと待っていても仕方ない、自分で動いて、この先を開いて行くのだと心から感じられる様になりました。

今自分はボランティアの皆様にも何もお礼する事も出来ませんし、自分本位な事をした様な気もします。しかし、いつまでもボランティアのお力ばかり借りてる事出来ません。いつか自立して行かなければなりません。差し伸べてもらった手に心よすがりました。そしてそこから自分の道を開いて行きました。きっとボランティアの皆様も自分の手の中から巣立って行く事を楽しみにしておられると思います。その時が、本当にされる側とする側の気持ちが一いつになれる時だと思います。

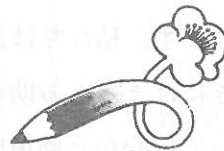
皆それぞれ生活も事情も異なって動くに動けない方が多いと思います。そんな中でも、少しの時間でも、田舎の良い空気を吸って、或いは環境を変えてみるだけでも、きっとリフレッシュ出来ます。今より悪くなる事はないと思えば、きっと元気も出ます。色々な機会を見つけてチャレンジして下さい。自分の経験だけで生意気なことを言ってますが、本当に自分はもう昔のことは忘れて、明日からの生活をこれから計画して行くつもりです。こんな生き方も、一つの生き方だと思います。

2月13日 岐阜より 山本(前住所・神戸市灘区)

チェルノブイリ救援・中部収支報告  
(1994年10月1日-1995年2月28日)

収 入	金 額	支 出	金 額
前期繰越	9,933,833	医薬品代	4,676,843
救援寄付金	9,507,413	粉ミルク代	2,048,800
個人 (429件)		医療機器 (保育器・超音波)	10,300,648
団体 (23件)		医学書	103,082
運営費カンパ (53件)	569,400	救援物資輸送費	791,511
物品売上	161,698	キリ・リュ-ダ滞在費	553,902
郵政省国際		竹内氏持参FAX	41,596
ボランティア貯金	9,303,000	阪神大震災関係	825,239
預金利息	8,176	電話代	141,670
		印刷費	144,332
		郵送料	606,885
		旅費	74,631
		パソコン部品代	93,523
		コピー機修理費	24,514
		会場費	23,600
		NGOの集い参加費	66,000
		パンフ購入費	24,000
		人件費	285,700
		家賃・光熱費	223,109
		備品・消耗品	15,618
		雑費	31,835
		小 計	21,097,038
		次期繰越	8,386,482
合 計	29,483,520	合 計	29,483,520

《振替用紙から》



活動を継続させるエネルギーは、大変なことです。担い手が若い人達へ次々と受け継がれるとよいですね。

ウクライナの国が、早くチェルノブイリ被災者の救援を出来るようになることを、祈っています。

今まで、ポーシェでお世話になっていることに対して、ほんの気持ちです。脱原発の視点を忘れないで。

息子がケガして、見舞金をいただきました。息子がこれも送つてと言うので、いつもの金額より少し増えました。ごろう様です。



## ウクライナからの手紙 (1995, 2, 14に届いたFAX)

皆様こんにちは。

私は、20日前にアロカSSD-500(超音波診断装置)を受け取り、ゼレムラ村に移住しているチェルノブイリ被災者たちからの深い感謝をお伝えできることを、とても嬉しく思います。

そこには、327人の被災者たちが住んでいて、誰もが甲状腺の検査を含む綿密な検査を一年に2回は受けなければなりません。私たちは皆様の贈ってくださった装置の助けを得て、定性的なレベルではそれをやれると願っています。ゼレムラ村の人は皆、日本の友人が私たちにアロカを贈ってくれたことを知っています。

今、私の病院の医師2名がアロカSSD-500の操作を勉強しています。一人は外科医です。不幸なことには私たちの所には、新生児の先天的な奇形児がたくさんいます。今はその理由は分かりませんが、私たちはすべては低レベルの放射能に因るのではないかと疑っています。私たちの仕事は、これら先天的な奇形児が出生前の異常妊娠と関係があるのかどうかを見つけ出すことです。私たちはあなた方の装置の助けでそれが出来ることを期待しています。

一方、移住者にはたくさんの甲状腺の病気がみられ、事故前の7~8倍に達しています。それらの25~30%は悪性腫瘍(ガン)です。私たちはこれらの病気もアロカの助けで見つけたいと思っています。ところで、ゼレムラ村の近くにもう一つ別の移住者のための村が建設中です。そこには多分200人以上の移住者たちが住むことになるでしょう。

私たちの病院のすべての医師たち、すべての移住者たちを代表して、私はあなたとチェルノブイリ救援・中部のメンバーの皆様「私たちを助けて下さったこと、そして、私たちの住民とウクライナの人々に対する人間愛とご親切に対して、心から感謝いたします。」と申し上げます。私たちは遠い日本の友人たちをいつまでも覚えています。皆様が必要なときにはきっとお助けするでしょう。

皆様の国に起こった地震に対して、心から同情申し上げます。皆様に降りかかった問題と困難を乗り越えることが出来ますように。

私たちは、チェルノブイリ救援・中部のメンバーが、いずれ私たちを訪ね、アロカSSD-500の有用性と有効性を確かめられるよう望んでいます。

皆様のお仕事と、皆様がしているすべてのことがうまくいきますように。

さようなら

ジトーミル州、パラノフカ地域病院長 ウラジミール・グリシュチェンコ

## 竹内さんからの手紙

こちらでは、2月が学期末ということになるので、お世話になった日本人留学生や親しくしていたドイツ人留学生がキエフを離れるということになり、さらに竜谷大学から新しい日本人留学生が来て、彼の面倒を見なければならぬということもあり、最近では授業の内容も難しくなってきた、宿題も相変わらず多いということもあり、お世話になったウクライナ人学生で日本語を勉強している人が、日本大使館の奨学試験（これに受かると1年間無料で日本で勉強できる）を4月に受けるので、その手伝いなどありまして、せっかくチェルノブイリ省等から入手した資料にもまだ目を通せておりません。

先々週から週1～2回、ロシア文学の講義も聞くことになり、毎日の語学の授業でもツルゲーネフの散文詩などと読んでいて結構高度な内容なのですが、いまいち基本文法がしっかりと身につけていないので、結構苦勞します。（中略）

今年に入ってから、こちらでは異常な暖冬で、3月に入ってから毎日日中は10℃を越える暖かさ、すでに雪はどこにも見かけられません。市場の野菜も種類が増えました。しかし、値段は安くなりません。パンや新聞の値段も上がりました。ドルのレートは、ここ数カ月13万～14万クーポンのあたりを上下しています。新しい日本人留学生が市場でスニーカーを買うのに付き合いましたが、丈夫そうできれいなのが25ドル、いわゆるロシア帽は10ドルでした。ちなみに皮のジャンパーが250ドル。誰が買うのでしょうか・・・。

では、お元気で。

1995, 3, 6 竹内

## ジトーミル州における チェルノブイリ原発事故 に関する最新情報 (1995, 3, 19・現地からのFAX)

1) 汚染地域内には、1994年末で40万7200人が居住している。その半数が労働可能年齢層で30%が年金生活者である。強制立ち退き区域内には、今なお3500家族がいる。非汚染地域内には、16歳までの子どもが、87,300人住んでいる。彼らのうち45,400人は汚染レベルが、5～15キュリー/kmの地域に居る。1994年の1年間に3,234人が移住した。彼らのうち半数以上はナロジチ地区から出ていった人である。

2) 1994年には、移住者のために住宅362、学校7、幼稚園6、病院3、浴場10、が建設された。

3) 非汚染食料品の確保の割合

☆肉類：28,6%、 ☆バター：46%、  
☆マーガリン：19%、☆野菜：38%

4) 発病率は1993年に比較して増加した

☆放射能汚染地域から避難した人：31,4%  
☆事故処理にあたった人：8,2%  
☆被災者：6,1%  
☆避難した子ども：7,2%  
☆汚染地域内の居住者：8,8%

州内の死亡率は人口1万人当たり17,4から18,5に増加した。治療施設における医薬品、設備、医者は不十分で確保率48%である。

5) 汚染地域における作付け面積は、1986年と比較すると75,500haで22%減少した。牛と水牛の頭数は25%減少し、牧羊、養鶏は廃止された。

6) 事故後処理の主要な問題は金不足にある。市場経済に踏み込んだ国家は必須の方策を講ずる能力を持たず、その結果プログラムは実行されない。

# 特集 「種の絶滅時代と遺伝子汚染」

## 第4回

(講演内容から抜粋；1989，11，21)

### 野生生物の保護 (続き)

生物がどんどん減っていくので、最近何とか遺伝子を保護しようというような話を良く聞きます。世界中の植物の種子を大きなビルの中で何十万種も零下何十度という冷凍庫でずっと保存する。そんな遺伝子バンクが作られています。どんな意味があるのでしょうか。植物の種子は1000年くらい保存しても発芽出来ます。しかし、そういう植物の成育環境がなくなっているのに遺伝子を保存しても仕方ありません。遺伝子の保存というのはどうももっと産業に役立つ事を目的にしているように思います。動物園で努力している方には悪いのですが、トキの人工繁殖をやろうとしてもなかなか出来ない。そもそもトキの成育環境がなくなっている事が問題なのです。生物というのはある密度以下になると、種を維持出来なくなってしまうのです。

### 放射能の脅威と遺伝子

遺伝子に対して人類は新たな脅威を作りつつあります。皆さん良く知っているように、放射能は遺伝子に突然変異をもたらします。昔から放射線遺伝学という研究分野が出来ていてバクテリアやショウジョウバエなどに放射線をあててどんなふうにも形態や性質の遺伝が変化するか調べることで、遺伝学は進歩してきたのです。放射線が遺伝子に直接変化をもたらすことは自明の事です。それが実験室で行われているうちは良かったのですが、核兵器や原発等で放射能が人工的に日常的に作り出され、生活環境に出回って来るようになると、長い目で見た場合遺伝子にとっても大きな脅威となってきます。

原発は原子炉の中で放射能を絶えず増やし続けています。100万キロワットの標準的な原発の場合、作られる放射能の量は1日に大体広島原爆の3発分に相当します。それが毎日毎日原子炉の中にたまっていきます。そういう原発が現在世界中で430基ほどあるのです。放射能の総量はすごいものです。おおざっぱに言えば1年間に世界中で1兆キュリー以上の放射能が作られています。分かりにくいと思いますが、これを法律的な許容濃度まで薄めようとすると、世界中の海水を全部使っても間に合わない。その何十倍も必要です。だからその放射能をいかにして環境中に出ないように封じ込めるかが大問題なのです。もし事故や不注意で出てしまえば、あらゆる生物にとって脅威となるわけです。それが放射性廃棄物の管理の問題で、今後日本でも大きな課題になります。技術的にどうするかは意見が分かれています。確固たる技術は今のところありません。1000年とか10000万年という長さで考えると、所詮放射能が地球上に拡散していくのは防げないのではないかという危惧があるのです。

チェルノブイリ原発事故は私達に放射能を完璧に管理するのは不可能だということを教えてくれたわけです。(続く)



# 各地のたより

チェルノブイリ救援中部・豊橋



手元には、何も資料がありません。時間的なこととか、脈絡とか全く無視して、わたくしなりに豊橋の自己紹介をさせていただきます。

きっと、みなさんご存じでしょうが、現在、ボランティア養成の財政援助で、キエフ大学へ2年間の留学に行っているのは、かつての「柿の木屋」の竹内君です。竹内君は、今も豊橋のメンバーと言ってよいでしょう。

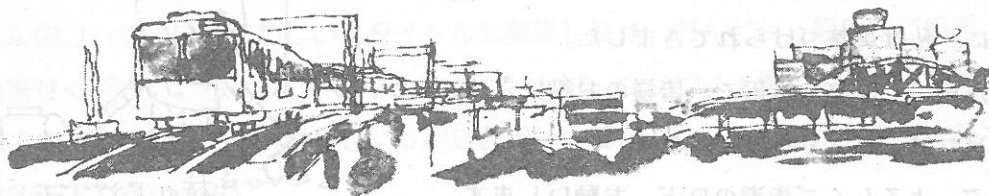
柿の木屋は昨年4月をもって閉店しましたが、豊橋で活動が継続できたのには、柿の木屋の存在がきわめて大きいのです。みんな柿の木屋にいつとはなく出入りし、そこからいろいろな活動がはじまりました。店を切り盛りしていた和代さん竹内君は、24時間拘束の事務局員みたいなものでした。話が果てることがなければ、営業時間も際限なし。

わたしは、飲みたいワインがあると買い込んで、和代さん、竹内君と飲み比べなどをやっていました。わたしも、いつのまにか立ち寄るメンバーになっていたのです。チェルノブイリ原発の事故の1986年4月26日、たしかその直後の5月の連休に柿の木屋は自然食レストランとして開店したと記憶しています。

その後の、伊方、反原発のうねり、広瀬隆の講演会、浜岡原子力発電所への行動（何度浜岡まで通ったことか）、原発いらないひとびと、エコロフェスティバル、などなど。「柿の木大学」などという連続講座みたいなものもやっていました。

豊橋のメンバーはそこから発して、今、チェルノブイリ救援に関わっている人間が、大半ということになるでしょう。

チェルノブイリ救援中部・豊橋=反原発ネットワーク豊橋、と言うような具合なものです。救援という言葉、あるいはボランティアということ念頭に置いて、チェルQに関わるという人がいるのですが、ネットワーク豊橋は、<70km>を発行して（=浜岡原発と豊橋の距離）この発行者、購読者がすなわち豊橋のメンバー。そして1頁分は、そのタイトルも8000km、キエフからの寄稿です。やはり柿の木屋の存在は大きく、現在は事務所はありませんので、月2回の会議のたびに場所を指定して全員集合です。いずれは事務所が必要なかもしれません。新しいメンバー獲得のためにも。（市川 寛）



## 《車椅子・粉ミルク・無事出港しました》

チェルノブイリ原発事故処理作業員に車椅子を贈ろうとお願いしてありましたところ、全部で16台ご寄付していただきました。

3月10日、この車椅子は粉ミルク2,000缶(200万相当)と共に名古屋港からウクライナへ出港しました。中古の車椅子もありましたが、新品同様に磨き上げられました。(いつも何かとお世話になっているH氏と救援・中部の事務局長が修理屋さんになった)

予定では4月24日に黒海のおデッサ港に到着し、ジトーミルの移住基金によって、車椅子の力を必要な原発事故処理作業員に届けられることになっています。車椅子を提供して下さった方々、また、車椅子についてのアドバイス、梱包財の手配をして下さった方、運送・海運会社の皆様、ご協力ありがとうございました。

## 《事務局だより》

前号のポレーシェで、スタッフを募集したところ、5名の方々が応募して下さいました。ありがとうございました。

その方々の中から、ロシア語に堪能な、松田幸枝さんを新スタッフとして迎えることとなりました。やる気満々の、しかも整理整頓の上手な(この点が何よりうれしい)女性です。“チェルノブイリ”への思いも深く、これからいろいろ協力しながら、事務所で仕事をやっていきたいと思います。(山盛)

## 松田幸枝さんの自己紹介

始めまして、松田です。

昨年、8月まで、1年間ロシアに(中年)留学してきました。

ロシア市民でさえ、チェルノブイリの事故を痛恨事と思いながら、自分たちの生活に手いっぱい、何も出来ないでいます。日本で、この中部地方でも、チェルノブイリの被災者に思いを寄せ、自分の出来る限りの救援を惜しまない人々が大勢おられることに、私は勇気づけられてきました。

これからは、事務や雑用で、皆様のお役に立つことが、少しでも出来れば、と張り切っています。

どうぞ、よろしくご指導のほど、お願いします。



校のゴミではない、事務局の不コリ。



## 《編集後記》

／チェルノブイリにかかわって3年半、この機関紙の名前をロシアの女性の名前だと思っていた。今回、岐阜が“ポレーシェ”を担当する事になり、初めてその意味を知った。そして、“ポレーシェ”のタイトルをデザインしてほしいと言われた時、「その風景を入れよう」と考えた。しかし、市内の本屋をハシゴする事5～6軒、地理の本から自然林、旅の本等々の中にポレーシェの写真を見つけることはできなかった。が、ある旅行ガイドブックに載っていた地図の中に、この言葉を発見。『ポレーシェの森』、それはウクライナとジトミルの境界線のあたりに小さな文字で書いてあった。これだ、これに違いない！こんなスタートをきって、“ポレーシェ”のタイトルは、勤め先の会社で、上司のいないスキを縫って製作された。(M・K)

☉初めて編集というものに携わり、皆(メンバー)の横でボーッと感心している間に、一回目が終わってしまい、何も出来ない私だが、編集の苦勞がわかったようでした。最近ではサリン事件で、阪神の震災のことが新聞やテレビから消えがちで・・・人の記憶からも離れてしまうのだろうか？それと同じように、チェルノブイリの事も忘れてしまうのだろうか、人災は2度と繰り返してはいけないと思う。だから、教訓としてわすれてはいけない事もあるのでは・・・。(尚子)

☉オウム真理教に関する記事が連日紙面を埋め尽し、震災のニュースはほんの僅か。避難所では、まだ8万人もの人々が不自由な生活を余儀無くされているというのに。物忘れの良さは国民性なのか。『ほんとうの神戸を語る会』で話し、唄ったAさんの“どうか神戸を忘れないで！”の叫びが、今も耳についてはなれない。一方、現地からの報告によると、ウクライナの状況はますます深刻さを増している。無力感ばかりが募ってくる。(幸)

☉読みやすいポレーシェを合言葉に編集を大下さんから引き継いだが、原稿が盛りだくさんで、前号にひきつづき増ページになってしまった。次号からは“救援とは何だろう”とか自由な意見交換が出来る《読者の広場》を作ろうと思っています。皆さんのコーナーにふさわしい、タイトルも募集します。どんどん、原稿、ご感想をお寄せください。ちなみに、“ポレーシェ”とは、ウクライナ地方の美しい湖沼地域のことで、一年で一番美しい5月に救援・中部のメンバーが、ウクライナを訪れる予定です。(み)



— あなたも維持会員になって下さい —

チェルノブイリ救援の活動を続ける為に、事務局の維持費用が必要です。事務量が  
増え、新しいスタッフも仲間入りしました。是非、事務局維持会員になって下さい。

☆維持会員会費 10,000円/年 (または 1,000円/月)

(※通信欄に“維持会員費”と記入して、下記の救援・中部の口座にご送金を。)

お知らせ (下記の救援・中部までお申し込み下さい) ↷

- ◆救援・中部のTシャツ 一枚1,500円。ステッカー 一枚200円。好評です。
- ◇救援・中部オリジナルテレホンカード 一枚1,000円/50度数
- ◆『絵はがき集』 1セット5枚300円 (子どもたちから届いた手紙や絵)
- ◇『たった一回の原発事故で』一冊515円+送料51円 (救援・中部編 地湧社)
- ◆『とどけウクライナへ～私たちの救援日記』1,648円 (坂東弘美著 八月書館)
- ◇現地ジャーナリスト・ネチポレンコさんと小児科医・ライサさんの来日講演録  
一部 350円 (専門家の解説付)

— 4月から代表が変わります。 —

新しいチェルノブイリ救援・中部の代表は、浜松の渡辺春夫さんです。  
渡辺さんは救援・中部が発足したばかりの1990年、最初に重い救援物資を  
背負ってウクライナを訪ね、その後何度も現地を訪ねています。

事務所に導入したパソコンを自由自在に操作して、名簿整理にも大活躍  
ですが、心の優しい人というのが、私の実感です。

ずっと縁の下の力持ちで、救援活動を支えてみえましたが、“表舞台は  
僕には向いていないよ”と本人は思っているかもしれないけれど、初めての  
の男性の代表で、大いに期待しています。 (前代表・寺町みどり)

《事務局》 〒466 名古屋市昭和区楽園町137-1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：渡辺春夫

【郵便振替】00880-7-108610 (旧番号 名古屋8-108610も可)

☎fax: 052-836-1073 (月・水・金・10:00~15:00)

(問い合わせは、お名前とシールの番号を明記し、返信用切手を同封の上、  
なるべく郵便でお願いします)